

『色里三所世帯』試論

三 浦 邦 夫

両作品に類似・共通の文辞をさらに求めるならば次の個所を附け加えることが出来る。

(1) 「江戸」について。(Aは『三所世帯』Bは『好色盛衰記』の文章である)

A「女といふ物は丹後ふしの淨瑠璃本にて見るより生しよはなかりけり。先男世帯にして四五人食めしはまはり焼たきに……」巻下の二

「所ならひにて男世帯を人もとがめず」巻下の三

B「今むさし野々、広きすへへまで、人家に立つづきて、諸国の武士町人爰に入込ていづれをみるにも男世帯にして高野のごとし、年たけたる、大前髪の草履取、是をみるより外なし」巻下の四

「江戸」は「女に事かく」所であり「男世帯」であるとすると概念がみられる。

また

A「江戸飛脚に金荷をわたしけるに……もうけに行金をつかひにくだりぬ。」

巻中の五

「人は商売の利徳を望み爰(江戸のこと―筆者注)にくだりけるに」巻下の

三

「世間の人は御江戸へ金銀まうけにくだりけるに」巻下の四

B「親の身として久離を切事、大かたならずむかしは丹波越とて、京都をはなれしが是もふるくなつて、近年は江戸へくとくだりけるに、当所あてところなしにも請人屋あつて、命をつなぎぬ。」巻下の二

新興都市江戸の景気を目あてに江戸へ下るといふ当時の現状への言及(註④)、

「江戸下り」の叙述は『日本永代蔵』にもその用例がみい出される。例えば「新六枕に立より我らも京の者なるが旧里断れてお江戸を頼に下りけるが」(巻二の三)「京の室町れきく人の男子……十五年がうちに此財宝しよみなにな

西鶴著作の好色物のうち『色里三所世帯』は、彼の自作を疑われて来た作品であるが、その文体・用語の特徴から西鶴自作の可能性を実証しようとする論考(註①)が発表され、西鶴自作を首肯しうる結果が得られてはいるが、その内容の猥雑・卑俗のために西鶴自作を認めるのに躊躇ちゆうじゆさせるものがあるのが、まだ十全な作品論のない理由であると云えようか。したがって、本稿では、先述の論考を踏まえ、なお西鶴の他の作品との文辞・文想の類似関係を検討しながら、この作品の内容分析を試みたいと思う。

註(1) (イ)「色里三所世帯」(『国語・国文』第十九卷第二号)岸得蔵

(ロ)「色里三所世帯について」(『西鶴研究』復刊第一集)東明雅

(ハ)「好色盛衰記と色里三所世帯」(『日本文学』昭和三十一年二月)

笠井清

(ニ)『西鶴評論と研究』下 暉峻康隆

二

『色里三所世帯』(以下本稿では『三所世帯』と略称する)の出版された貞享五年(一六八八年)に西鶴は「貞享伍辰年」の刊行年を記した奥付のある『好色盛衰記』を出版している。貞享五年は九月三十日をもって元禄と改元されたため、『好色盛衰記』出版は貞享五年の九月以前と推定され、同年六月下旬出版の『三所世帯』との前後関係は不明ではあるが、笠井清氏がその文辞や趣向・内容の部分的な類似・共通の個所を指摘して評したように、この二つの作品は「二つの円が一部分相重あひあったようなところがある」(註②)のであって、『好色盛衰記』が西鶴自作である以上、『三所世帯』にも西鶴自作の可能性を首肯するに足る密接な関係を認めうるのである。

し江戸へかせきにくだりける。」(巻六の二)

(2) 「美形の衣装」について。

A 「衣装つき皆くろしゆすに白ぬめのうら付て、銀のかくし絞はだ着は白ちりめん薄綿入むらさきと浅黄とうちませのなごや帯、素足にばらをの藻ぞうり」巻中の四

B 「肌に白じゆす、袋ぬいの小袖着て、中にむらさき鹿子の両面、うへに袖の浅黄染にともいとのぬい絞……竜門中幅帯素足にわら草履のいたりぜんさく」巻四の三

A の文章は「諸国男執行」の女達の衣装についての言及であり、B は太夫「ふじやの金吾」についての描写である。ともに「小いたづらなる目つかひ腰つき是やどうもならひで」(『三所世帯』巻中の四)、「是はなんともならぬ美形」(『好色盛衰記』巻四の三)の文脈の規定をうけて「遊興」の場に身を置く女の魅惑的イメージの形象化を意図した文章である。色彩と布地の名の類似もある。

(3) 「塵も灰も残らぬ」について。

A 「つめにはしばのけふりとなり、跡には塵も灰も残らぬ事のよしや世語り。」巻下の五

B 「其夜道頓堀の野墓の煙となし、塵も灰も残らぬ朝ゆふべは此物語終りぬ。」巻五の五

西鶴にとって、岸得藏氏も指摘^{註(4)}しているように「はしば」や「道頓堀」の「煙」は死のイメージであり、死の無常を「塵も灰も残らぬ」との比喩的表現に託すのが常である。

(4) 「遊興の日数」について。

A 「今の一座を残らず三十日づつの約束すれば爰(江戸吉原のこと―筆者注)もむかしに違ひこなない事怖なれば」巻下の三

B 「三野もすがりの折ふしこのおとこ……ばっとしたるよねぐるひ清十郎座敷にて、かしらから三十日の約束」巻四の五

三十日の買詰は、経済的に沈滞の兆候が現われはじめた貞享前後の町人社会にあっては、奢の沙汰の遊興であった。三十日という日数はそうした遊興の、時代に不相応な豪奢さの「ばっとしたる」様相への言及である。この他「好色盛衰記」巻四の二にも武州の大臣の「八月十四日より九月十七日迄三十四日間柏屋の門にも出ず色遊び」の例も見られる。

以上の文辞の類似・共通の部分的指摘は、先述の論考と相まって両作品に緊密な結び付きのあることを示唆するのに十分であるが、『三所世帯』の主人公「外右衛門」の形象のあり方の分析を通じて、なお一層その緊密なることの確実性を求めようと思う。

註(1) 「好色盛衰記と色里三所世帯」笠井清

註(2) 『好色盛衰記』も質疑本の一つであったが、笠井清氏の用語の検討などにより西鶴自作が確定した作品である。(『好色盛衰記考』『国語

国文』昭和九年七月、笠井清)

註(3) 「色里三所世帯」岸得藏

註(4) 註(3)と同論文

三

「都の東山岡崎といふ所に、いまだ廿五に一とせたらぬ男の若隠居かまへ黒谷ちかけれ共仏の道を嫌ひ親の精進日さへさりとあげて、歌のさま鞠にも心をよせず、ただ人のもてあそびは女道と思ひ入金銀有にまかせて酒淫美色に身をかためうきよの外右衛門と申ならはせり。」(巻上の「恋に関有女すまひ」) 右の叙述を分析して知れることは、作者が「外右衛門」の人間像を形象化するにあたり、(1)「いまだ廿五に一とせたらぬ」年令で「若隠居」を構えていること、(2)「歌のさま鞠にも心をよせ」ないこと、(3)「人のもてあそびは女道と思ひ入金銀有にまかせ酒淫美色に身をかため」ていること、の三つの条件を、その構成要素として与えていることで、(1)はその年令・身分階層と状況(ないしは環境)であり、(2)はその古典的教養性、(3)はその享楽的資質であって、そこに作者の「遊興」および「大臣」と称される人間に対する視点が設定されている。この視点から描写された「遊興」と「大臣」像との典型を『好色盛衰記』にみることが出来る。

奈良の両の手大臣(巻一の「是は新房崎の大臣」)は「色道ばかり、かしく渡世の事にはうとし」と西鶴は云い、その享楽のあり様を「花月、小太夫ふたりまで請出して、我宿の楽寝、右にひだりに三つ枕をならべ、春の夜のなぐさみ替て、いにしへの八重桜の名残千本のこぎへに絞付の救灯提をつらせ、飛火の野守も出て見よ、今の全盛、おそらく此鼻の高さに、二月堂の杉にすみて、羽のはへたる人もをそれ給べし。」と叙し、その享楽も「なんぞの金のひかり」への依存であると云い切っている。このような大臣を評して西鶴は次の

ように云うのである。「殊今時の大臣といふ男、先祖の筋目、また生れ付のたかきにもあらず、それ／＼の家業に仕合のよき人、詩歌くはんげんに身をなすにもあらず、遊女のもてあそびを、もつぱらとして淫酒にみだれ、金銀を費す人をいへり、其形をみれば、黒羽二重に三寸紵、袖の大嶋の長羽織、あたまつきは物の入事にあらず、何時からも是には成ぬべき風俗なり。」(巻一の三「久七生ながら俄大臣」)

「銀さへあれば何時なりともかしこく、花奢に分しりとなつて、女良町の栄花殊更何事もならぬといふ事なし、今いふもふるけれども極まる所は銀の世の中。」(巻二の五「仕合より六蔵大臣」)

これらの評言から『好色盛衰記』執筆時期の西鶴の△大臣▽観を知ることが出来よう。次に、△遊興▽に關しての端的な評言としては「大かたの事してはおもしろからず、昼の月見夜の花見世のつねをはなれ、人のせぬ事をするこそ悪所宿の自由なれ、其身に何の徳もなく金銀の有にまかせて、女郎はなる事にこしらへ置て高位の淫乱にもおとらじ。」(巻一の二「是は新房崎の大臣」)の記述がある。

『好色盛衰記』に呈示された西鶴のこの△遊興▽への評言は、先に引用した△大臣▽観と照合し、そこから得られる△遊興▽と△大臣▽観は次の二点に絞ることが出来よう。第一は「金銀の有にまかせて」の「世のつねをはなれ」た△遊興▽の豪奢さであり、第二は「其身に何の徳もなく」「詩歌くはんげんに身をなすにもあらず」の言辭に表示された古典的教養ないしは素養の欠如、すなわち△遊興▽の精神性の欠如であり、『三所世帯』における「外右衛門」形象化のための三つの構成要素を設けた視点と全く軌を一にしているのに気付く。そして、このような△遊興▽のあり方を「高位の淫乱」と結び付けるイメージは『三所世帯』で「諸事の役人もみな女のさばきにして二十四人色作りの女にたはぶれる」「外右衛門」の享楽の極みを描写するにあたり「天子に后十二人諸侯に七人の艶女大夫に三人の愛女諸士に二人の戲妾あるに極まれり。」と対比する記述と同イメージである。

ところで、『三所世帯』、『好色盛衰記』に呈示された△遊興▽観・△大臣▽観は、この兩作品にさきがけて、しかも同年の貞享五年正月に出版され、始めて町人の経済生活を主題に取りあげ、町人物の嘴矢とされる『日本永代藏』に既に散見しているのである。

「町人も、親にまふけさせ、讓狀にて家督請取、仕にせおかれし商売、又は

棚賃、借銀の利つもりして、あたらし世をうか／＼とおくり二十の前後より、無用の竹杖、置頭巾、長柄の傘さしかけさせ、世上かまはず、僭上男いかに、おのれが金銀つかふてすればとて、天命をしらず、人は十三才迄は、わきまへなく、それより廿四五までは、親のさしつをうけ、其後は我と世をかせぎ、四十五迄に、一生の家をかため、遊業する事に極まれり。なんぞ若隠居とて男さかりの勤をやめ、大勢の家来に、暇を出し、外なる主取をさせ、すゑを頼みしかひなく、難儀にあはしぬ。」(巻四の一「祈る印の神の折敷」)

ここにみられるのは、親の蓄財を譲り受け若隠居をして△遊興▽に散財蕩尽することへの西鶴の否定的言辭であり、わづかに「十三までわきまへなく、それより廿四五までは親のさしつをうけ、其後は我と世をかせぎ、四十五迄に一生をかため」た後の「遊業」を説くという、一定限度内での「遊業」を消極的ながら容認するに過ぎない。消極的「遊業」も町人生活一生の理理的な「身のもちよう」(同巻四の一)として描かれるのだが、それも「所酒のから口、饞のさしみを好み、其身栄花に明」(同巻一の五「世は欲の入札に仕合」)しての果てに「此家次第におとろへ天命をしる年になりて、平生の不養生にて頓死」(同巻一の五)する曝布の買問屋松屋の何某のように、その「栄花」・「遊業」も限度を超えるもの、すなわち「分際より、万事を花麗にするを近年の人心、よろしからず。」(同巻一の五)、「人の風俗、次第者になって、諸事、其分際よりは、花麗を好み……身の程しらず。」(同巻一の四「昔は掛算今は当座銀」)として「分際」を過ぎた「奢」であることを論じ、つまるところ衰微破滅に直線的につながる道に他ならぬことを強調し、特に「○美色・淫乱、絹物の不断着」(同巻三の一「煎じやう常とはかはる問業」)を、破滅に導く「奢」の第一に掲げ、「分限」になるためには厳守しなければならぬ「毒断」(同巻三の一)として、否定するのである。

したがって、親の莫大な遺産を讓渡され「算用なしの色あそび」(同巻二の三「才覚を笠に着大黒」)に耽溺する二代目の△遊興▽は必然的に否定されるわけで、その諸相を巻一の二「二代目に破る扇の風」、巻二の三「才覚を笠に着大黒」、巻五の三「大豆一粒の光り堂」に、その集約的言説を巻六の二「見立て養子が利発」の「京の室町れき／＼人の男子、何の商売なしに……大分の銀がして世をわたり此利銀、毎日、貳百三十五匁づつのもりに、入けるに、何やうにか、つかひ果しける。十五年がうちに、此財宝、みなになし、江戸へ、かせぎにくだりける。」にみる事が出来る。この二代目の△遊興▽否

定の根底に、「我と世をかせぎ」という町人としてあるべき姿を踏みはずした点に、その否定の視点基準を設けているのは『日本永代蔵』に「大福新長者教」の副題を附し「今時はまうけにくい銀」（同巻一の二）を儲けるための貨殖・処世の道を説き、その原理を「工夫」と「智慧」・「才覚」に見出し「只、智慧、才覚といふも、世わたりの外はなし。」（同巻五の二「世渡りには淀鯉のはたらき」と喝破し、「我と世をかせぎ」「世の費、ひとつも」（同巻一の二）おろそかにせず、「諸山の出家をよせず、諸牢人に近付ず、すこしの風気、虫腹には自棄を用ひ」（同巻一の二）るのも、「町並に出る葬礼には……人より跡に帰りさまに、六波羅の野道にて……苦参とまやく引て、是を陰干にして、はら葉なるぞと、只は通らず、啼く所で燧石を拾ひて、袂に入れて。」（同巻二の一）のも「生れ付て悟きにあらず」（同）「よろづ、か様に氣を付ずしては、あるべからず。」（同）の儉約の精神と「正直」（巻四の一、巻四の三）との「町人心」（巻四の五「伊勢まびの高買」）の倫理性に発見した西鶴にとって、当然のことであり、それ故に、『三所世帯』、『好色盛衰記』で示した△遊興▽・△大臣▽の否定的概念は、『日本永代蔵』で発見した「只、金銀が、町人の氏系図になるぞかし」（巻六の五「智慧をはかる八十八の升擡」）と「金」を視点の中心にすえての貨殖・致富の原理と「町人心」の倫理性とから改めて見なおされ導き出されたものであったといえよう。

というのは、「分際」を過ぎる「奢」の△遊興▽として否定される「美色・淫乱」は、西鶴初期の好色物において「人間遊山のうはもりは、色里に増事なし。」（『諸艶大鑑』巻一の二「誓紙は異見のたね」）と△遊興▽の「うはもり」——最上のものと考えられていたからである。事実、初期好色物に属する『好色一代男』、『諸艶大鑑』は、町人の△遊興▽の「うはもり」の諸相を肯定的に描き、「粹」・「分け知り」・「情しり」の言葉に代表される構造を有する「色道」の美意識と好色遊興の枠内における男女相互の「心中立」・「まことの心」の倫理意識の讚美と理想化とを企てたものであった。だから、初期好色物の△遊興▽の中核をなす「色道」概念は、『日本永代蔵』で発見した町人のあり方の原理と倫理性に照し出すならば、町人の生存基盤を瞬時に「きのふは町人けふは百性ニ成」（『好色盛衰記』巻四の二「煙に替る形大臣」の副題）にしめすことく根底から崩壊する「毒」素として△遊興▽の「うはもり」から「毒」への変換をよぎなくされ、『好色盛衰記』での否定的色彩の濃く帯びた描写をよぎなくされる結果となったのである。「好色」の盛から衰へ、す

なわち「祇園悪所の銀つかひ諸わけ無情の男あり、溷座配の花代突止、逼迫の小ばらひを頭す、これ盛さかんこれ衰へるふたつ、女若の好色かすかひ」、『好色盛衰記』巻一の一「松にかかるは二葉大臣」とする「好色盛衰記」創作の必然性もそこから理解されねばならないであろう。また『源平盛衰記』のパロディによるこの冒頭の戯文意識もその否定的態度から生れたイロニカルな意識に支えられたものであることを認識するのである。「むかし法師の女良町では物くるる友と書き給へり」（同巻一の一「夢にも始末かんたん大臣」）、「ほしき物は銀なりと吉田の兼好法師が、人には見せぬ家の集にかけるも、是ばかりはよいといふた」（同巻四の一「一生栄花大臣」）のように『徒然草』のパロディの散見も全く同じ意識に依拠するものであろう。

△遊興▽の否定的概念に立脚して、あえて△遊興▽の諸相を描くとすれば、「殊今時の大臣といふ男……遊女のもてあそびを、もっぱらとして、淫酒にみだれ、金銀を費す人」（『好色盛衰記』巻一の三）であり、「銀さへあれば何時成ともかしく、花奢に分けしりとた」（同巻二の五）り、「其身に何の徳もなく」（同巻一の二）「先祖の筋目、また生れ付のけだかきにもあらず、それ／＼の家業に仕合のよき人、詩歌くはんげんに身をなすにもあらず」（同巻一の三）となり、「色里かよひも……第一金子」（同巻五の二「当流師仕立の大臣」）であり、「金子」さえあれば「何時からも是（大臣のこと）筆者注）には成ぬべき風俗」に「仕立」上げ「当流の師」になることが出来、色里も「揚屋へ内証申はまつ金銀福成、大臣なり。」（同巻三の四「腹からの師大臣」）のように「師」よりは「金銀福成」ことが優先し、遊女も「今時の太夫は幅のある天職には見をとりぬ、天神は又むかしの廉女郎よりは風義あしく成ぬ、十五かこひはまたつほね女良よりあさましく、さりとはむかしに、なしたき物は此里の諸分なり。」（同巻三の一「難波の梅や浜大臣」）と批評され、「遊女は、びんぼう公家に同じ、襲束して、子細らしく座に付、和歌の沙汰する時は、是外の間人なり、万事脱すて、常のすがたは、色のこしろきかうやく売に替る事なし。」（同巻四の三「情に国を忘れ大臣」）とまで酷評するほか手だてのない西鶴の立場が認められる。またそのために採られた叙述方法として「今時」と「昔」とを対比するという比較の概念に依拠するのも、『日本永代蔵』を通過することによって確立した方法といえよう。

それ故に、(イ)「若隠居して」、(ロ)「歌のさま鞠にも心をよせず」、(ハ)「女道と思入れ、金銀あるにまかせて酒淫美色」として『三所世帯』に三つの視点を

設定したのは、西鶴にとって当然の帰結であった。

『三所世帯』での島原・吉原の遊里における当時の大臣の様相も、太鼓の一人に「大かたのきげんとりても今の世の大臣小判にならず」（巻上の五）「恋に違ひ有女形氣」と悲歎させ、「惣て女郎買、金銀手に有時は此里の諸分まへかたにて気のつかぬ事多し、万事人の差因をうけずかしこくなる時は内証明て心ばかりいたりてひとつも物にならず」（巻上の五）、「師になればかならず金なし、前かたなる太郎殿には金のある徳にてうとき座敷もかしこく見え」（巻下の三）「恋に違ひ有女の肌」、遊里自体も「今此世界につかひ手のきれめな時分」（巻上の五）のため「小判すてねば合点せぬ勤めの濡」（巻下の三）として描かれることになる。遊里のこの実状を背景にして、「外右衛門」が島原に「ばつとしてわけよく出」（巻上の五）た「人間業とは思はれぬ」遊興も、「諸分は京の嶋原に身なし、口舌は大坂の新町に魂をくだき、はりつよき所を江戸のよしはらに見初」（巻下の三）での遊興も、しよせんは「銀の神の威光」（巻上の五）「人の始末するめんつうをかしらからす所の覚悟」（巻下の三）の結果であるとする点に視点をすえることに変りはないし、『三所世帯』巻上・中に描かれた女相撲・女行水・女川狩・女床等の「外右衛門」慰みの遊楽も「是皆外右衛門小判のひかりなり」（巻中の三）「恋に網有女川狩」との言評を下すことになるのである。

「外右衛門」の遊興の対象である「二十四人の色作り女」（巻上の二）についての言評「かかるたへがたき男に大勢勤めけるは女の身の因果此うきめにあふも銀がかたきの世にぞ有ける」（巻上の二）「恋に風有女涼み」や、十五六から十八九までの娘を前金拾両で集め後家の風姿に改めての遊興も、その親の身になれば「世に身すぎ程かなしき物はなし」（巻中の二）「恋に座敷有女髪切」と認知する言辭等には「好色二代女」でみせたような女の本能的要求としての欲望に焦点を絞るのではなく「銀がかたきの世の中」（巻上の二）という経済的要因に視点を合せているのは、遊女を「色のこしろきかうやく売に替る事なし」（『好色盛衰記』巻四の三）と否定しながらも、その実状を「むかしのごとくかぶき者にあらず、まづしき親の渡世のたよりに身を売れて、身を売る女良とは成ぬ。惣ていやしき女にもあらず、是に定る筋目にもなく、時節にしたがひかくこそなれ」（貞享五年二月刊行『武家義理物語』巻四の四）「丸綿被きて偽の世渡り」、「神ぞいたづらにはあらず、親のためばかりにちいさき時より風呂屋の勤」（『好色盛衰記』巻五の三）「皆吹あぐる風呂屋

大臣」の叙述に示された経済的要因への洞察とその視点の基準を一にし、遊女の本体を「かぶき者」あるいは「いたづら」者として受けとめた初期好色物にみられた意識が、経済的破綻ゆえの遊女への転身として把えなおされてもいるわけであって、町人がその生存基盤である「金」ゆえのどうにもならぬ破綻の結果として、その実体の一側面をみ出し出している。西鶴の遊女に対する概念は「かぶき者」への讚美と理想化の態度から「流れの身」の必然的要因への把握という認識の深化にもなっており、変貌をとげているのである。

遊女に対する概念の変貌と相似の転換をみせているのが、遊興する男に對する認識で「粹」・「分けしり」から「無分別者」・「うつけ」者とする認識への転換がある点に留意しなければならない。この遊興する男に對する認識の転換地点に貨殖・致富の原理と「町人心」の倫理性との把握が媒在しているのを認知することは、初期好色物と『好色盛衰記』との間に「日本永代蔵」が位置することで十分であろう。なぜなら、「粹」・「分けしり」が、「つかひはたして今此身になって分けしりとはなりぬ」（『好色盛衰記』巻五の二）という莫大な数量の蕩尽と生存基盤の破壊との差し換えに得られた結果であるとみなす視点からは、「たはけの沙汰」（同巻三の三）「反古と成文宿大臣」であり、「無分別もの」（同巻二の三）「都を見ずにもぬけ大臣」・「無分別成仕過し」（同巻三の二）であるとする認識は必然で、その「仕過し」は好色への抜き差しならぬ人間の物量的性的なだれ込みそのものであり、そのなだれ込みの中に深く耽溺する人間の脆弱性を「たわけ」・「無分別もの」の語に西鶴は託したといえる。『好色盛衰記』巻三の二に描かれる三人の大臣は、四十まで「朝暮小判を溜」、分限になって妻を離縁し吉原に通うのだが、「算用なしのつかひ捨、兼ては二十年あまりに此金銀皆になれかすと心当せしに、いまだおもしろき最中四年がほどにさし引残て、拾七両式分松屋といへる揚屋のそんに成てわけもなふ仕廻ける。」結末は、たとえ「四十五迄に一生の家をかため遊楽することに極まれり」（『日本永代蔵』巻四の二）を町人の遊興のあるべき姿と容認しても、ひっ境、好色へのなだれ込みとその中への物量的性的耽溺への必然を防ぐすべのないことの証左である。それ故、好色へのなだれ込みに脆弱性を露呈した人間が西鶴に云わせれば「うつけ」・「無分別もの」なのである。

それならば『三所世帯』の「外右衛門」はどうであろうか。

「我ままなる遊楽……又上もなき奢」（巻上の二）に對し「なんぞ仕合にも

とづき物毎自由なればとて、色かへ品替心を替て京と武蔵と難波に民の窟の三所世帯をかまへ、さまざま情をかけ持ちかねのわらんちにても追付足のつづくまじき事を外より見て(続いて「いたづらに」とあるべき所を丁移りのため脱落したものを註)なげきぬ京は山水の沢さんなる所なれ共、此水(腎水のこと)筆者註)へりては取かへしのなかりき、無分別に異見のいひ手なく……(巻上の一)の叙述、「分別の外右衛門はかつて智慧なき神ごころ……」(巻中の一)・「外右衛門もいまだ分別所へゆかぬ年なれば」(巻中の五、以上傍圍筆者)の叙述は、先に論じた「うつけ」「無分別もの」に対する認識の系譜に位置することは明白であり、巻上の一の目録に附せられた「まよすがあまつて独りころびの男、見へた／＼智慧のない所が」(傍圍筆者)の副題が、このことを裏付ける。そしてこの副題の戯れは、「無分別もの」「外右衛門」に対する揶揄であつて、そこにあるのは戯画化する意識であり、その意識の底にあるのは、『好色盛衰記』の戯文意識を支えたと同じ否定的批判に基因するイロニカルな態度であろう。女相撲・女行水・女川狩などのけたはづれな遊興の諸相を描写し、それを傍見する人物にあてられた、例えば「あれを／＼と二人の男歯切をしてもぜひなく最前の湯が水になる迄詠めつくし」(巻上の三「恋に焼火有女行水」)・「竜宮の乙姫水底より見て今は堪忍ならず、いかに銀でなる事なればとてさりととは遠慮なし……其男共めをうはなり打ちと……胴をうたせて其ひまに中にも大きなるりんのたまをもつて竜宮の浄土へ帰られける」(巻中の三「恋に網有女川狩」)などの戯文や二十人の美女のうち十七人懐胎し全て歌舞伎若衆への恋慕ゆえであるとの説話・強蔵競いの説話などにみられる発想の戯謔は、好色への物量的情情的なだれ込みを誇張するための形象化であり、こうした発想による趣向立は、読者に対するジャーナリスティックな態度から出たものであつた点は十分に認め得るとしても、この趣向立を逆手にとつて、「人間業」(巻上の五)とも思われぬ遊興に「たわけ」尽すことへの戯画化を通じて否定的批判を企てたイロニカルな態度に依るものであつた点に注目すべであらう。

以上の分析結果を基礎にして、初めて『三所世帯』の主人公に命名された「うきよの外右衛門」の意味を説明することが出来る。『三所世帯』ではこの命名の他に先に引用した「分別の外右衛門」の命名と二つの命名が主人公に贈られているが、この二つの命名は共に切り離しえない構造をもっている。すなわち、「分別の外右衛門」は、明らかに「分別の外」と「外右衛門」との懸

詞を利用しており「分別の外の外右衛門」の意味を形成させて、主人公に「分別の外」の資性を与えたことを意味している。なぜなら、この命名を次のように「分別の外右衛門はかつて智慧なき神ごころも／＼の末杜めしつれ」(巻中の一)の文章の中で用い、「知恵のない神に知恵つくる」の諺を利用して人知恵のない男に知恵をつける末社をめしつれ∨の文脈を形成していることと、さらにこの文脈を誘導したのが巻上の一の副題「見へた／＼智慧のない所が」であらうから、そうした文脈形成意識の流の中でこの命名の意味付けを受けとらねばならないし、また振り仮名を施し懸詞の機能をその解釈に要求していることが、先述の分析を証明する。一方「うきよの外右衛門」の命名は、『好色一代男』で世之介を「浮世之介」と命名した系譜を引くものであろう。「浮世之介」は「浮世」と「世之介」の結合から生み出した方法であることはいうまでもないが、それと「分別の外右衛門」の方法とを考慮するなら「うきよの外右衛門」は、「うきよの外」と「外右衛門」であり、「浮世」を享樂する「外右衛門」であると共に「浮世を外にする外右衛門」の意味を荷なうのである。「浮世」を享樂しながら裏を返せばその享樂は「分別の外」の資性をもつた人間の「無分別」の極みであり、「浮世を外にする」局外者としての意味附である。それ故「浮世」の「無分別」な享樂性と「分別の外」である資性の局外者の象徴としての命名であることが判明する。この命名のあり方の背後に、「浮世」の概念が西鶴の内部で二つの意味を帯びていることに気付くはずである。

「浮世」は、浅井了意の『浮世物語』にみる「浮きに浮いて慰み、手前の措切も苦にならず、沈み入らぬ心立の水に流るる瓢箪の如くなる。」(巻一の「浮世といふ事」との定義を継承し『好色一代男』の「浮世の世之介」に代表されるように享樂性の概念を与えられていた。それが「金の世」の意味の概念をもつにいたつていて「今うき世に、よい事をさすはずでなし」(『好色盛衰記』巻二の一)、「目も鼻もなき、小判が物いふ浮世には成りける」(同巻四の一)にその例証をみることが出来る。享樂から金への現実認識の転換地点に、「うき世に住に哀れ多し」(『日本永代蔵』巻三の三「世は抜取の観音の眼」)の町人の現実に視線をあて、その生存基盤を探って到達したのが「つまりは銀の世の中」の認識であつた『日本永代蔵』が位置することと異存はあるまい。

さて、「うきよの外右衛門」の命名に象徴された「うつけ」者の意識と局外

者意識は、『婉久一世の物語』（貞享二年二月刊行）の「婉久」を「むしょう男是なり。」（巻上の二）と定義して性格破綻者に形象化した意識に既に胚胎していたといえよう。系譜的に遡行するならば、『好色一代男』・『諸艶大鑑』の「世之介」・「世伝」に象徴される好色への無限のなだれ込みを「色道」の語に代表される美意識と倫理性との側面で讚美・理想化^{註6)}した「かぶき者」の意識につながる。というのは、「かぶき」がその語源を「かぶく（傾く）」にもち、異風・狼藉の意味を荷なつた言葉であり、「かぶき者」が異風者・狼藉者の意味をもつ局外者意識に支えられていながら、その異風・狼藉振りゆえに「一つのもだん味」^{註7)}をもつたことは、好色における「かぶき」が、無限の好色への「かぶく」こと―なだれ込み（傾倒耽溺）でありながら、その限りない狼藉振りの熱量に支えられて「美的な乱暴」^{註8)}の美意識と倫理とを局外者の現実の場に位置するための原理として確立しえたことにあり、それを可能にしたのが経済的興隆期にあつた上層町人の資本力であつた。

「婉久」の好色への「かぶき」を、『好色一代男』・『諸艶大鑑』の「もだん味」の側面からではなく、性格的破綻による異状性に求めた地点からは、『三世所帯』・『好色盛衰記』での好色への傾倒耽溺に露呈する人間の脆弱性と、それ故にまねく局外者として「無分別もの」・「うつけ」者と規定する否定的意識の措定までは、ほんの一足であつたろう。

だから『三世所帯』で「外右衛門」を「歌のさま鞠にも心をよせず」（巻上の一）として好色の美意識を形成する精神的基盤の欠如が呈示されるのも局外者に対する否定的意識の発現であつて、それも『好色盛衰記』での俄大臣を評して「詩歌くわんげんに身をなすにもあらず」（巻一の三）と云い、また無芸の俄大臣が金銀ゆえに嘲される現実の肉体にもつづいてのことであつた。

その結果、「外右衛門」が、京・大阪・江戸の△遊興▽の果てに「京より岡付の金子も今はのこりすくなくなり」（巻下の四）「恋に焼付有女鍋尻」、「腎虚」して「浮世の所帯やぶりわれく／＼なりと今となって身の上合点して俄に無常を觀じ小塚原のくさむらにひとつのはりをむすびて」（巻下の五）同道した十一人と「是に取こもり後の世をねがふてみれ共」（同）夢に現にあらわれる女達の執心に責められ「女はうはいやじゃ／＼といひ」（同）悶死する結果は、好色への「かぶき」が経済的物量の破滅につながるると同時に人間性それ自体の喪失に直結することを示唆する。「かねのわらんちにても追付足のつづくまじき事を外より見て（いたづら）になげきぬ京は山水の沢さんなる所なれ共

此水へりては取かへしのなかりき」（巻上の二）と冒頭から既に破滅と喪失の結末を暗示し、「す衛たのもしき奢是もいつぞはやむ時節あるべし」（巻上の五）、「京より岡付の金子も今はのこりすくなくなりて……殊更好色におぼれたる我々病死は本意にあらざ女郎と打死と極め腎水あるほどかへほしけるとなり」（巻五の四）と各説話の進展途上でその結末を暗示する。これは、経済的隆盛と破滅の象徴としての「金」と「此水」・「腎水」に象徴される所の人間が好色へ「かぶくこと」の肉体的無限の熱量としての生命力の横溢に依拠し、『好色一代男』で世之介が「女護の嶋」渡航に準備した品物のうち「牛房、薯蕷、卵をいけさせ、櫓床の下には地黄丸五十壺、女喜丹式十箱、りんの玉三百五十」（巻八の五）の多量の強精剤のある理由であり、「譬ば腎虚してその土となるべき事。たま／＼一代男に生れての、それこそ願の道なれ。」（『好色一代男』巻八の五）と「女護の嶋」渡りにしめした歡喜の言辞も「美的な乱暴」が成立しうる根底に好色に「かぶくこと」（傾倒耽溺）への無尽蔵の生命力の横溢があつたからである。一足誤れば、耽溺から生ずる人間の脆弱性と頽廢の深淵の上に「色道」の美意識と倫理性とが築かれたのである。したがって「腎虚」は好色に「かぶくこと」への生命力の枯渇であり、好色の肉体的存在基盤の喪失であるといえよう。

先に指摘した「外右衛門」の美意識の欠如とこの「腎虚」に象徴される生命力の枯渇は、「色道」の原理を保持保守する情熱の衰退であり、その結果は、露呈した人間の脆弱性と頽廢との深淵への投身だけが残される。「殊更好色におぼれたる我々病死は本意にあらざ女郎と打死と極め腎水あるほどかへほしけるとなり。」の「好色におぼれ」切ることへの徹底したあり方はまさにこの深淵への投身であり、△遊興▽に強敵として陽根を競う賭勝負（巻中の一）は好色の頽廢に他ならない。

「浮世の所帯やぶり」の言葉を「生計の失敗から合意の上で夫婦が離婚すること」の意味の「所帯やぶり」の言葉に「浮世」を冠して「色遊びの自己破産^{註9)}」の意味にしての造語の使用は、それ故「無分別もの」・「うつけ」者と局外者との否定的意識を呈示したことであるのは確実であり、「小塚原のくさむらにひとつのはりをむすび」隠棲するのも、「うきよの外右衛門」・「浮世の所帯やぶり」の言葉に託された局外者の意識の具現に他ならないであろう。

註(1) 「今」「昔」の比較概念は『諸艶大鑑』にも散見するが、この作品が

遊里を遊山の「うはもり」と標榜する意識に支えられてある以上、遊興の否定的概念の形成に有効であったとはまだいえないであろう。

註(2) 『定本西鶴全集』第六巻頭註

註(3) 「色里三所世帯」岸得藏、「好色盛衰記と色里三所世帯」笠井清

註(4) 『椀久一世の物語—評釈と論考—』(明治書院) 笠井清著

註(5) 世伝の大往生を「世の中のかれ男に物のかぎりをしらしめんがため也。廿よりうちのさばきは、此道に入る皆足代と分知り和尚も、ときたまへり。それより十年大興に入て、太夫の有がたい所を覚え、四十より内に、留る事をさとらずば、揚銭の淵に沈む事、まのまへ也。」

(巻八の五)と覚えての結果とする叙述に、好色の「遊興」への批判的言辭がみられ、『日本永代蔵』の「遊興」に接続するのだが、描写は明るい栄花の場面が多く、徹底した没落の場面は少ない。従ってカッコ付の批判的言辭である。しかし、このカッコ付の批判的言辭が「極久」の否定的描写を導いたことは認めなければならないだろう。

註(6) 『日本近世文学の成立』第三部元禄の文学二「好色一代男」論—かぶき者の美学—(法政大学出版局) 松田修著

註(7) 『折口信夫全集』第十七巻「無頼の徒の芸術」(中央公論社)

註(8) 右同全集第三巻「ごろつきの話」一八美的な乱暴

註(9) 『定本西鶴全集』第六巻頭註

四

出版界の要望によって書かれた『三所世帯』が、描写の低調さと内容の卑猥さに大きなウェイトが置かれているとしても、その背後に西鶴の前述の意識が張りめぐらされていることを知らねばならない。その意識の反映が「外右衛門」を、「うつけ」であり「浮世の所帯やぶり」とする好色の「遊興」への否定的意味を荷なった人物としての形象化を誘導したのである。『三所世帯』が『好色一代男』の延長線上にありながら、直線的に結合するのではなく、「町人心」の考察から得た「町人」としてあるべき姿の認識を談理する過程があった、すなわちそこに一つの屈折し転換する『日本永代蔵』という媒体があったて成り立ちえた作品である。だから『好色一代男』の世之介が「女護の嶋」へ渡ること、『諸艶大鑑』の世伝が「女色の台」で大往生することの結末と対照的に、女の心に責められて「女はうはいやじゃ」と悶死するイロニカルな

結末を『三所世帯』が持たざるをえなかった必然性がそこにある。

『好色一代男』の世之介が、「かぶき者」の局外者でありながらその「もだん味」のゆえに町人の夢であり理想であるという矛盾をはらんだ両面構造のうちの「もだん味」の側面の讚美であったとすれば、『椀久一世の物語』の椀久は「もだん味」への耽溺を通して局外者の側面を精神的破綻者として把握したのであった。そして「椀久」の地点から『三所世帯』の「外右衛門」を否定的局外者としての「うつけ」者・「浮世の所帯やぶり」に規定し、人間性の喪失として措定する意識が生ずるためには、「遊興」を「うつけ」・「無分別」とする意識に対比される意識の措定がなければならない。貨殖・致富のための才覚と工夫という原理とそれを生かす儉約・勤勉・正直の「町人心」の倫理性の発見が、「無分別」とする意識に相対することを強調談理させたのであり、町人が「分際」をわきまえることに相対する「分際」を過ぎた「奢」に耽溺することへの批難が『三所世帯』であり「好色盛衰記」であった。

また、「外右衛門」の「遊興」を軽薄・卑猥に描く意識には、現実の遊里とそこで遊興がかったの理念的実質を失ってゆくことへの喪失感が西鶴にあり、それが『三所世帯』で「人間業」とも思えぬ「遊興」を描きながら、暗さと張りのなさを印象づける由縁であろう。そして全説話に誇張された「遊興」の戯謔的描写は西鶴のこの喪失感から生じたイロニカルな態度の発現であり、「遊興」をもちや生の高揚とはなしえない「浮世」に対する現実認識から発した否定的批判意識に支えられたイロニカルな戯画意識の現われであった。

商業資本経済が、その興隆の頂点にそれ以上の発展を望みえないという閉塞と衰退を感覚させ、特権商人にかはって新しい分限者を生み出すとともに極度の貧困者をも生み出すという空隙の時点にあって、西鶴は「町人心」を談理したのであり、この空隙を感覚しえない町人の「遊興」を「無分別」・「たわけ」として指摘し、「分際」を過ぎない「遊興」を説く『日本永代蔵』の眼には、「分際」を過ぎた「遊興」は「奢」の沙汰と映ったのである。

『好色一代男』で「かぶき者」の「もだん味」を讚美した眼と比較するならば、大いなる成熟をとげた眼なのである。

『浮世』が享楽の世という現実認識から金の世という経済的な現実認識を必要とする転換期にあって、なお「浮世」の「浮」を夢幻し「浮」に傾倒耽溺する人間の姿は、「たわけ」であり「浮世の所帯やぶり」としなければならぬほどの頹廢であった。そこに西鶴のイロニーが生れる。幻影の「浮世」に蕩尽し

ながら「小判が物いふ浮世」に背を向ける局外者への否定的批判意識を西鶴は『三所世帯』で戯画的に形象したのだといえよう。この戯画的形象化を誘引したのは、「たわけ」・「浮世の所帯やぶり」の頹廢へのイロニカルな視線に他ならない。

だから、『色里三所世帯』は、西鶴にとって、やはり「転合書」の姿勢に貫ぬかれた作品であったといえよう。(四三・八・二)